

「令和の学校」って どんな学校？

(56)

■山添村立山添中学校

名張市・伊賀市と隣接する山添村。名張駅から近鉄利用、村の中央を通る名阪国道を利用して伊賀市へと、通勤通学をはじめ買い物や就労等村民の生活は両市とのつながりが強い。その名阪国道山添IC近くに堂々たる校舎と広々とした運動場の山添村立山添中学校。その沿革を辿ると、戦後の新制中学校として、昭和22(1947)年4月開校の東山村立東山中学校・豊原村立豊原中学校・波多野村立波多野中学校に遡る。その後、昭和31(1956)年、三村合併により山添村が誕生。3校が山添村立と名称変更する。昭和62(1987)年、3校が統合され、山添村立山添中学校が誕生し、今年で36年目を迎える。そんな山添中学校に岡田浩幸校長を訪ね、山添中学校の取り組みを聞かせていただく。

——「コロナ禍での教育活動は。」

9月4日に「少年の主張奈良県大会」が本村を会場として開催された。当日は入賞者10人が発表したが、最優秀賞に本校3年植田琴羽さんの「後悔する前」

体験談をまとめ、意見発表した。本校では、言語活動や発表体験を重視しているが、毎週木曜日には生徒が発表、年一回全員が行う。また最近では生徒だけでなく、教師も全員行っている。ただ、コロナ禍では、全校生が集まることができなくて昨年は録画しての発表であったが、今年は発表をライブ中継し、教室に配信している。こうして、自分の考えや思いをまとめ、人前で発表する体験は生徒に自信をつけるし、より一層授業も意欲的になってくる。今回は、全校生徒の作品を送ったが、応募総数約2500作品の中から本校生が他にも優秀

賞や努力賞など10人以上が賞をいただいた。——今年で校長3年目と聞いたが、奈良市立柳生中学校を振り出しに、奈良県南部の上北山中学校、曾爾中学校を経て、本校に赴任。その後、奈良県教育委員会の人権教育や地域教育に関り、また国立曾爾青少年自然の家で、青少年や地域の教育活動に従事。そして、本校に再び教頭として戻り、一昨年校長として勤務している。それぞれの勤務地で体験することの大切さや学校に対する地域の人の期待の大きさを知らることができたことは私の教師としての宝であると思う。感謝である。

——ICT教育は。

本校生一人一台タブレットが導入されたのが、2年前の2月。機種を選定



岡田浩幸校長

自主・敬愛・剛健・献身・郷土愛 山中生



山添村立山添中学校

や校内LAN整備等多くの課題を抱えていたが、村教委の英断と保護者の理解、教職員の前向きな姿勢などが導入につながった。この時期はまだコロナ

国一斉休校にもオンライン授業が実施でき、まさに先見の明であったと思う。教職員研修も大学の先生を指導助言者として、招聘していただいたことも、その後の本校のICT教育

などが家庭で映像を見ながら進んでいただいている。学校に登校してない生徒に対しても、講話や連絡などを送っている。良かったのは、講話や連絡などを送っている。良かったのは、講話や連絡などを送っている。

を見つめなおすことの大切さ」を学ぶ良い機会であった。こうした学習をした後、「YIP(山添村いきいきプロジェクト)」ふるさと学習」を行っている。村長さんに村の課題を語っていただき、自分



車椅子バスケットボールを体験する1年生



2年生は沖縄の中学校とリモートで交流した

ていただいているかどうかアプリで確認もできる。もちろん生徒の使用実態などについて私も確認をすることができると。

——キャリア教育については。

1年生は、「身の回

験をしている。また本校教員が選手と知り合いであったという縁で実現できたものであるが、車いすの操作に悪戦苦闘しながらも生徒はバスケットを楽しんでいただいていた。「できないでなく、できること

拡大の前であり、公立学校での一人一台配布は全国でも珍しいとされているが、その後の社会状況から考えると、あの時のタブレット配布により、全

育の進展につながったと言える。実施の是非については議論した文化発表会は、保護者から開催の強い要望があり、発表の様子をタブレットで配信。学校で見られなかった祖父母

撮ったりインタビューをしたりして作り上げていっているが、今年はクイズ形式になっていて、その場に行つて写真と見比べて解答するように工夫している。また、村のYouTube作成にも関わらせていただいているグループもある。今山添村の副読本を作る話が出ているが、村から1年の生徒に「村内30ヶ大字」のそれぞれの特徴などをすくなく形式のクイズにしたものの作成依頼が来ている。生徒が自分たちの住んでいる地域を知る良い機会であり、教師にとっても村を知る良い勉強になると思う。

2年生のキャリア教育では、一昨年は実施できなかったが、昨年は小売業・鍼灸業・茶加工業・製材業など村内企業の協力を得て3日間実施したり、職業講話を行ったりしている。3年で修学旅行に

行くが、以前は沖繩へ行って平和学習などの勉強をしていた。しかし、コロナ禍で行くことができなくなったので、2年生の3学期に沖繩の中学校とリモートで交流を持ち、自分たちで作った映像や資料などを使って互いの学校や村の説明をしていた。修学旅行が終わってからは、自分の将来を見据えて進路を考える学習を行い、進路決定に結びつけている。

——小中連携については。
やまぞえ小学校とは1キロほど離れているので、日常的に合同の活動は難しいが、例えば、3学期には今度入学してくる6年生の児童に、本校3年がリモートで、中学校入学後の不安や授業の様子などを説明したり、児童からの質問を受けたりして「中一ギャップ」の軽減を目指した小中

連携を行っている。6年生からは入学後の不安や心配が、直接中学生に聞け、「入学することが楽しみになかった」などの声が聞け、小中学生の温かい交流だと思ふ。また、今年の新しい試みとしては、10月の中学校の体育大会に小学生も参加して、綱ひきや大縄跳びなどを中学生と一緒に行う予定。今後、小中学校の校舎や児童生徒数・教職員等多くの課題はあると思うが、小中連携教育はより一層進めていくことが必要となっている。

——保護者や地域の支援は。
とにかく色々な面で協力をいただいている。学校のため、生徒のためと地域ぐるみで協力してくれる。PTAも会長さんをはじめ、奉仕作業などの行事には会員のほとんどが参加。本当に有難いことである。

——部活動はどうか。
本校の先生方はとても熱心に部活動指導をしているが、教職員の働き方改革が言われている今日、部活動の指導に要する時間が多く、過重労働になり、大切な授業研究や生徒との話し合いの時間等が取れなくては、本末転倒である。本校では、生徒や保護者の理解を得、実際に生徒の活動現場に行く教員を「部活動担当」として、1部に1人と決めている。他の先生は、職員室で教材研究や生徒との懇談などの仕事を

行っている。もちろん「毎日直接指導したい」とか「先生に指導してほしい」と言った声もあると思うが、地域の人に指導者になっていただくと、国が言っている「部活動の地域への移行」も見据えて、こうした取り組みも必要かと考える。

◇ 山添中は1小1中で9年間同じメンバー、保育所から数えれば10年以上同じメンバーで生活をし、学習活動を行っている。この環境に変化を加え、刺激を与えるために学校ができるあらゆる活動を試験させたい、そんな思いが強い岡田校長。自身が生まれ育った山添村の子どもたちにもっと村を知り、村を誇りに思つて育ってほしいとの願いを、教職員が、保護者が、村教委が、村が共有しているのを強く感じた今回のインタビュー。学校の校門に到着した時、いち早く走ってきていただいた岡田校長に、優しさや心配りができる人との印象を持ち、学校の話・生徒の話を楽しく聞かせてほしい。

【山添村立山添中学校】
▽奈良県山辺郡山添村大西1044
▽教職員数11名 21名 21名
▽生徒数1162名